

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2013 年 1 月 28 日

派遣者氏名（専門分野）	中村 翼（日本史学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	南宋～元代の浙江地域を中心とする日中仏教界の人的交流からみた 日本禅宗形成過程の再検討
-------	--

派遣期間

2012 年 10 月 22 日 ～ 2012 年 11 月 4 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	中華人民共和 国	杭州	杭州大学	王海燕（杭州大学副教授）
		杭州	浙江図書館孤山館舎	

派遣先で実施した研究内容

派遣者は、本プログラムを通じ、南宋～元代の日中交流が日本禅宗の形成に与えた影響を解明する前提作業として、当該期の日中仏教界の人的交流の実態を把握するべく、その主要な舞台である杭州・寧波地域の現地踏査を中心に研究を実施した。

まず、渡航に先立ち、入宋僧・入元僧（日本から宋・元に渡海した仏僧）、渡来僧（宋・元より来日した仏僧）を中心に約 200 人の僧侶の事蹟について、主に彼らの語録に収録されている行状（伝記）をもとに調査・整理を行った。その際、彼らの中国における足跡の傾向および、日中間の往来状況を規定したと想定しうる日中間をとりまく政治的・経済的環境について、それぞれ時期的な段階差を考慮にいれつつ把握することに努めた。その上で、今回の渡航あたっては、南宋～元代を通じて日本僧が入港した寧波と、彼らの南宋期における主要滞在先である禅院五山（径山万寿寺・靈隠寺・天童寺・阿育王山広利寺・浄慈寺）や杭州の教院（天竺寺など）に足を運んだ。これら地域での現地踏査と今度の渡航をめぐる実体験を通じて、新たに研究課題とすべき論点を発見できたことは、大きな収穫であった。

また、禅院五山の関係史料である寺誌類（阿育王山志・天童山志など）の善本調査を杭州大学図書館・浙江図書館（孤山館舎）にて行った。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

（1）実地調査を通じて

南宋禅院五山は、南宋の事実上の首都杭州（臨安）と、寧波（明州・慶元）に位置する。とはいえ、杭州靈隠寺・浄慈寺が杭州市街に近接しているのに対し、径山・天童寺・育王山は中心部より数十キロ離れ、かつ山中に立地しているなどの違いが見られる。このことは、禅院五山が官寺としての機能面で共通するものの、前二者が皇帝および官僚層の遊山地として史料に所見する背景であると予想される。僧の伝記史料や日本の仏教関係史料では、これら寺院は一律に修業の地としてみえるが、同地で触れたであろう南宋の都市文化の影響などもふくめ、入宋僧・渡来僧が日本に将来した文化を仏教に限らず把握する必要がある。また、実地調査の過程で靈隠寺と天竺寺が近接していることを知った。これは、13 世紀初頭に南宋教院で学んだ日本律僧が禅院にも出入りしていた背景を考えるうえでも興味深い。また杭州

郊外に位置する禅院靈隠寺・教院天竺寺という配置が、13世紀中頃に当該期の日宋交流を世俗権力の側から主導したとみられる九条道家による京都東山の禅院東福寺・教院泉涌寺の創建という構想にいかに関わるのか、あるいは関わらないのかは、日本禅宗史では等閑視されがちで、都市と禅宗の関係を考察する上でも重要な課題であろう。従来、室町期の禅宗が都市文化として成熟していくことを日本化あるいは、宗教性の希薄化として捉える傾向があったが、かかる「日本化」は南宋禅院が本来持っていた性格である可能性もあり、両者の違いとその背景を追求していく必要を感じた。

## (2) 渡航の実体験を通じて

入宋僧・入元僧の伝記は高僧伝として書かれるため、個人の事蹟に関心が集中しがちである。だが、派遣者は、入宋僧・入元僧が、いかなるサポートをうけて渡航に臨み、滞在先でいかなるトラブルに直面し、それをどのように切り抜けていくのかなどに留意して彼らの足跡を読み込むことで、彼らをとりにまく環境を解明する方法を模索している。今度の渡航はいわば入宋僧・入元僧の追体験でもあり、それによって改めて認識した課題は多いが、その一部をあげる。

①入宋僧・入元僧の伝記史料は、高僧伝という性格上、彼らを送り出した教団あるいは外護者の存在は背景に退きがちである。しかしながら、資金・コネクションなどの面でも単身自力の渡航は困難である（現代日本よりも中世日本の方がその傾向は顕著のはず）。OVCプログラムをうけて、多くの阪大関係者が海外に渡航したように、特定の時期に特定の教団から集中的に入宋・入元事例が確認される場合（何度か存在する）には、背後にある派遣主体を想定する必要があるのではないかと。また従来看過されがちだが、入宋僧・入元僧の足跡には、修学先の選択など一定の法則性があり、そのことは渡海した僧個人の宗教的動機のみならず、個別の僧の背後にある教団の戦略を反映している可能性が高い。また、彼らの修学先が現地の人脈などの問題から渡航以前の計画とは異なる場合も想定されるが（派遣者の場合もそうであった）、その場合、渡航後に教団との間で問題が発生する可能性もあろう。その分析を通じて、教団側が渡海者へ期待したことや教団の戦略を解明するヒントが得られると考える。今後の課題としたい。

②派遣者は、今回、中国各地で起こった反日デモをうけ、渡航を見合わせるかどうかの選択に迫られたが、とくに入元僧の場合、日元戦争のあおりや倭寇事件による元側の対日防備状況（入国禁止措置など）や日本側の渡航制限などをうけ、渡元や帰国を断念、あるいは延期するケースが散見する。こうした日中交流を規定する政治・経済的条件の復元は、交流の事態解明には欠かせない。その一方で、こうした政治的要因が、貿易（商人にとっての日常）よりも留学（非日常であり、次の機会をねらえる）に反映されやすいことも事実である。従来、こうした僧侶の往来状況から貿易の盛衰も説かれてきたが、両者の関係はよりつきつめて考える必要がある。

③入宋僧・入元僧のなかには現地語に堪能で長期滞在を行う者がおり、従来、彼らの存在をもって日本禅院の国際性が説かれてきた。だがその一方、現地語に通じていない日本僧が多く宋元を目ざしたことも事実である。派遣者も後者の類に属するが、受入研究者の紹介により、現地の大学院生や同地に留学していた日本人学生の案内を受けることができた。日宋・日元交流においても、それに相当する寺院側の受入態勢があるものと見通せるが、従来こうした分野への関心は十分とはいえない。また、元代になると僧侶の活動領域が杭州・寧波のみならず、南京（金陵）や江西、さらには華北（現在の北京や西安）にまで及ぶ場合があるが、「普通語」がない状況下でいかにして現地語を習得するのか（日本での事前学習は困難）という問題にも留意する必要があると感じた。

以上、今回の渡航を通じて実感した日宋・日元交流史上の諸問題に言及したが、これらの解明は、渡航以前に行ったデータとの突き合わせや、関係史料の読み込みによって解決の糸口を模索する他ない。これらはいままで十分には意識してこなかった問題群であり、既存の史料からより深く情報を拾い出すことで新たな発見があるものと見込まれる。

## 派遣後の研究発表の予定

派遣者は、本派遣で得た知見をもとに、以下の研究報告を行う事が決定している。

・2013年6月30日：大阪歴史学会大会（中世史部会報告）

また研究報告をもとに論文作成と投稿を行う予定である。